

受験情報誌『栄冠をめざして』の研究 —1966~83年の河合塾が高等学校に伝えた受験情報—

三上敦史

学校教育講座 (日本教育史)

A Research of the “Eikan-wo-Mezashite”, Journal as a Preparation of University Entrance Examination ; Information given for High School by KAWAIJUKU during 1966 ~ 83

Atsushi MIKAMI

Department of School Education(Japanese History of Education), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

本稿は、全国型予備校（ないしは三大予備校）の一角として知られる河合塾が、1966~83年に塾生のみならず全国の高等学校の教師・生徒に無料配布し、また書店で一般発売していた受験情報誌『栄冠をめざして』（84年に教師用『Guide Line』と生徒用『栄冠めざして』に分割）に注目し、予備校が高等学校の進学指導の現場にどのような情報を提供してきたのかを歴史的に考察することを目的とする。同誌の発行期間は、地方の一予備校に過ぎなかった河合塾が、全国型予備校へと変化していく時期と重なる。その意味では、現代の教育史を裏面から分析する視座を構築しようとする試みでもある。

まず、河合塾の歴史について概観しておこう。同校は、五高・名古屋高商の教授を歴任した河合逸治が1933年11月5日に私塾「河合英学塾」として創設した。『河合塾五十年史』によれば、学則で「各種大学並ニ高等学校専門学校ニ入学スルニ必要ナル程度ノ諸学科ヲ適当且懇切ニ教授シ併セテ徳育体育ヲモ授ケテ完全ナル人格ノ陶冶ヲ行フヲ以テ目的トス」とうたい、高等学校・専門学校の2・3年生を対象とする大学受験科、中学校・商業学校の卒業生ならびに中学校在学者を対象とする高専受験科を設置した。高専受験科の教授科目は英・数・簿記・国漢・国史・要項・物理・化学・体操と高等学校・専門学校の受験に必要な全科目を網羅していた^{*1}。42年には愛知県から各種学校の設置認可を受けて河合高等補習学校と改称したが、戦時体制の深化を受けて44年に閉鎖となった。

戦後は1947年に河合塾の名称で私塾として再興、48

年に再び愛知県から各種学校の設置認可を受けて、河合高等補習学校とした。49年以降、河合逸治は名城大・名城短大・名古屋商科大の教授を歴任するが、河合塾の経営・教育も継続している。やがて55年には学校法人河合塾を組織、58年には大蔵省から非課税校として認可を受けるなど^{*2}、経営は堅調だった。

1. 高等学校への接近

河合塾の転換点は1964年であった。同年3月13日、河合逸治が死去する。実質的に個人経営であり、後継者を育てていなかった同校は、羅針盤を失った。

河合家で善後策を協議した結果、長男の^{あやと}（日本興業銀行）の知己である西田忠和（日興証券）・丹羽健夫（玉塚証券）に経営を委ねることとした^{*3}。西田は同年12月に入塾、名駅分校事務長に就く^{*4}。丹羽はやや遅れて、4年後の68年6月に入塾する。以後、この証券会社出身で、商社勤務の経験もある2人が経営の中心となる。

まず1965年、西田は文科系コース・理科系コースへのクラス分けを実施するとともに^{*5}、成績評価に偏差値を導入した。現在の予備校では当然の、受験科目に対応したクラス分けを行うこと、統計学的手法である偏差値を用いて学力の相対的な位置づけを知らせることのいずれもが、河合塾ではこの時に始まった。

従来、偏差値は東京ローカルで都立高校受験の指導用に使われており、必ずしも人口に膾炙した存在ではなかった。これを大学受験の指導用に導入したのは、管見の限り、この年の河合塾と旺文社が最古の事例である^{*6}。両者同時というのは、偶然にしては出来過ぎの感もあるが、当時、全国を網羅する予備校はなく、

また出版社（旺文社、福武書店）の模擬試験もそれほどの受験生を集められなかった。そのため模擬試験は全国各地の有力予備校と出版社が多様な組合せで共催して実施していた。例えば、同年度の河合塾の模試日程は以下の通りであった*7。

〔公開模擬試験日程〕

第1回	5月15日	河合塾主催
第2回	7月3日	河合塾主催
第3回	8月21日	名大コンクール参加
第4回	9月25日	一橋学院と共催
第5回	10月2日	駿台予備校と共催
第6回	11月13日	旺文社模試参加
第7回	12月4日	代々木ゼミと共催
第8回	12月25、26日	名大コンクール参加
第9回	1月25日	名大コンクール参加

各回とも会場河合塾]

9回のうち河合塾が単独で実施するのはわずか2回。他の予備校と共催するのが3回、他の受験産業*8が主催するものが4回である。模擬試験のデータが財産という考え方は存在せず、受験者数をどこまで伸ばせるかだけが意識されていたことの反映であろう。情報は持ち合いであり、偏差値の導入もどこかが始めれば、他もさっそく追従するのは不自然ではない*9。

同時に、高等学校とのパイプ作りを始めた。従来の予備校と高等学校は、アルバイトとして出講してくる教員を除けばほぼ没交渉であった*10。それを改め、模擬試験・講習会・学習参考書からはじまり、最終的には浪人することになった生徒に入塾を勧めるための営業活動（河合塾の内部では「フランチャイズ」と呼称）に、西田自ら東海地区の主要高校を頻繁に訪問した。手土産には年7～8回、4～8面の構成で作成し、塾生に配布している「河合塾新聞」を携えてである。

次いで1966年には事務局を設置し、西田は事務局長に就任、「教務と教授の分離」を実施した。具体的には、授業科目・時間割の設定、講師の手配などの教務を職員が担当し、講師は教授に専念させることを指す。ま

た、答案の採点やコメント記入は、教職経験者から採用する職員に担わせた。職員の位置づけや意識を単なる事務職から専門職へと変化させるもので、この延長線上に後述する「チュートリアル・システム」（68年導入）もあると考えられる。

こうした一連の改革の流れの中で、同年秋に創刊したのが受験情報誌『栄冠をめざして』であった。

2. 『栄冠をめざして』の創刊

『栄冠をめざして』は、当初から内部生および講習会生等に配付するためだけのものではなく、高等学校の教師をも対象としていた。既に配布中の「河合塾新聞」で受験関係ニュースは伝えていたが、それに加え『栄冠をめざして』はじっくり読ませる記事や詳細な資料を伝えることを目的としていた。

創刊号の構成は表1の通り。概文、受験校の選定方法、詳細な受験科目や難易度といった受験情報から、健康面の留意点や進学後の生活に関する情報に至るまで、さまざまな資料が並んでいる。

注目したいのは、〔Ⅱ〕に登場する「科学的」という表現である。科学的とは何か。「まえがき」には以下のようにある。

「本年度から、進学指導部では塾生諸君の実力伸長、学力の程度をより正確に測定し、成績に応じた進学指導を進めるため、バロース B373型電子計算機を導入しました。この電子計算機に、昨年度本塾生の模試成績と大学合格状況の関連性を統計数値として記憶させ、受験生諸君の模試成績と対比させることにより、志望大学への合格可能判定と学力に応じた志望大学、学部の決定が極めて正確容易になりました。さらに受験生の志望校決定の動向と来年度入試情勢の動向把握や、選択科目の入試への有利、不利その他従来カンにたよっていた事項や予測分野に大きな偉力を発揮しています。」

従来の高等学校の（いや、当の河合塾でさえ）受験

表1 河合塾進学指導部編『栄冠をめざして 昭和42年度入試資料』（1966年秋）の構成

学校長のことば 河合恒人 まえがき 進学指導部 〔Ⅰ〕合格路線を突っ走る塾生 1. 実力伸長度の確認と直前期の合格路線決定 2. 自信を抱いて突っ走るには 3. 学力は全国レベル以上（※1参照） 〔Ⅱ〕志望校の決定は人生の岐路——100%合格をめざす科学的進路選定—— 1. 受験校決定の三大要素 イ、進路選定——志望校別に応じた大学・学部・学科 ロ、入試科目と配点 ハ、実力の確認と合格可能性 2. 第二・第三志望校の選定 3. 入試期日とベストコンディション 4. 新設学部・学科に注目 5. 受験と健康 心と体のリズム イ、入試までの健康管理 ロ、可否に影響する健康	6. 大学生生活の経済面 イ、大学生の支出面は ロ、収入源 入試資料 資料1. 専攻学部別に見た大学一覧 資料2. 41年度主要会社・大学別採用状況 大学別司法試験・公認会計士試験合格者一覧 資料3. 入試科目配点と合格最低線〔※合格最低線は偏差値ではなく得点率表示〕 資料4. 合格基準点を設けている大学 資料5. 国語に漢文を含まない大学 ヒアリング・ディクテーションを課す大学 資料6. 実技試験を課す大学・学部とそのウェイト 資料7. 42年度新增設大学・学部・学科 資料8. 大学・学部別にみた学費一覧 別冊資料 ママ 42年度主要大学学部別・入試課目数・難易度関連表 42年度全・国公立大学入試日程一覧
--	--

表2 『栄冠をめざして 前期編 昭和43年度入試資料』（1967年7月1日）の構成

学校長あいさつ 河合恒人 まえがき 進学指導部 〔I〕42年度入試をかえりみて 1. 浪人勢・現役を圧倒 2. 競争率をゆさぶった入試科目負担の増減 3. 激戦突破の原動力となった意欲と根性 〔II〕来春の入試戦線を探る 1. 受験者数は来春がピーク 2. 明春入試はどう行なわれるか 43年度入試選抜方法 調査書・能研テストの問題点（※1参照） 〔III〕実力はどのくらい伸びるか 1. 塾入塾後の実力の伸び 2. 現役時との実力水準比較 〔IV〕実力はどうすれば伸びるか 1. 塾の指導方針と入試対策 2. クラス再編成の方法 〔V〕心と体の入試対策 1. マイペース学習法 2. 夜型学習と二度睡眠	3. スランプは生活リズムの乱れ 4. 心と体のための課外活動 〔VI〕合格を左右する志望校決定 1. まず学部・学科を決めよ 2. 模試成績の見方・活し方（※2、※3参照） 3. 受験校決定の時期とその影響 〔VII〕前年度資料から見た合格・不合格の条件 1. 模試成績と受験校合格の実態調査 2. ボーダーライン上で合格を分けた諸原因 (i) 学力推移の状態が及ぼす合格の分岐点 (ii) 科目相互のアンバランスが合格に与えた影響 (iii) 基本科目の強弱が合格に与えた影響 〔VIII〕目で見る塾生活 入試資料編 1. 塾生42年度大学別合格者数 2. 42年度入試における主要大学・学部別合格の実態 3. 42年度入試における主要大学合格者の模試成績 4. 専攻学科別に見た進路適性と大学一覧 5. 42年度入試大学別・学部別配点・合格最低点表
---	---

指導が、進路指導部のベテラン教員など一部の人間の「カン」に頼っていたことを批判し、偏差値による指導の利点を述べている。すなわち学力は点数の多寡ではなく偏差値に換算する。その結果、ベテランであれ若手であれ、同じ受験指導を行えるようになる。都内の中学校の教育現場では偏差値の導入によってこうした考え方が主流になりつつあったが、大学受験の指導の場にもそうした発想をとり入れたのであった。

ただし、これに続けて、以下のように書く。

「予備校では、これらの指導資料を研究改善することはできても、塾生一人一人の数年にわたる生いたち、個性的分野には残念なことです。充分知ることは困難です。心理テスト、性格分析等を通じ極力努力いたしておりますが、それにも限界があることは否定できません。そのため、塾生の出身、在学高校の進路指導先生に、本塾での模試成績その他をご連絡し、高校の先生、河合塾が密接に相携えてご指導いたしております。」

塾生100%合格をめざし、ここに種々の角度からご利用頂ける小冊子を作成しました。充分活用いただくとともに、僅少な疑問でも遠慮なくご質問下さるようお願いいたします。」

河合塾にとって、高等学校は単なる批判の対象、あるいは営業の場ではなかった。営業の場であると同時に、共に塾生の受験指導を考えるパートナーだった。

塾生の出身高校の教員と「相携えて」指導するためには、在校生の成績提供もすれば、情報誌も送付する。そして、それは予備校と高等学校とのパイプを構築し、拡大することでもある。すなわち、模擬試験・講習会・学習参考書の売り込みからはじまり、最終的には浪人することになった生徒に入塾を勧めるための「フランチャイズ」のツールの一つとして『栄冠をめざして』は誕生したのである。

3. 偏差値の導入と盲信への注意喚起

1967年から『栄冠をめざして』は前期編を7月1日に、後期編を12月1日に発行するようになる。構成は表2の通りで、時期が早いため受験生活のすすめ方に関する内容が多いという相違点こそあれ、前期編と同様に多種多様な情報であふれている。なお、「学校長あいさつ」には「本年度第一回父兄会を催すにあたり」とあり、父兄会で配付する資料をも兼ねていた。

なお、この年から、従来は年9回だった模擬試験を必須受験10回・任意受験10回へ倍増させ¹⁾、返却資料には偏差値・合格可能性の打ち出しを開始する。このことは以下のように説明している。

「△偏差値……統計学上の標準偏差法にもとづき計算されるもので、問題の難易による平均点の上下や、満点値の大小に関係なく、すべて50が平均になるよう計算される。偏差値の利点は、①各科目相互の実力比較が容易で、盲点診断と不得意部分の発見に役立つ。②各回の編集長を比較することにより、実力の伸長度を測定する。③受験大学の選定と志望大学への合格可能性を判定するうえで合理的である。」

△合格可能性判定……受験科目の総合平均偏差値をもって合格可能性を判定する。前年度在塾生の模試成績と受験大学合格状況を資料に、電子計算機が作成し記憶している入試難易ランキングと総合平均偏差値を照合し、志望大学への合格可能性判定を行なう。基礎シリーズ中の公開模試（第1・2回）に於ては、時期尚早のため、合格可能性判定を加えないことにしている。

△合格可能性判定の表わし方とその意味

(イ) ほぼ確実……現在の努力を続けるならば、志望校へはほぼ確実に合格する。

(ロ) かなり有望……合格圏にあるが、安心するこ

とは禁物。

(ハ) ボーダーライン……合否線上にあり。もう一段の努力で合格圏へ突入できる。

(ニ) 今後の努力次第……今後実力の伸びを期待し、さらに一層の努力を望む。

(ホ) 再検討を要す……学習方針を再検討し、飛躍的な実力の伸びを要す。」

大学の難易度は昨年並みで今回の模擬試験が入学試験だったと仮定したら合格の可能性はどれほどであったかを冷厳に算出することの合理性を説く文面は、現在と何ら変わらない。相違点は、「ほぼ確実」「再検討を要す」のような短文ではなく、A～Eという評語で打ち出すようになった点ぐらいか。

ただし、丹羽によれば、このように予備校が実施する模擬試験で偏差値・合格可能性が打ち出されてくるという現在ではごく自然なことも、当時は河合塾内部で賛否両論があったという¹²。否定する側は、受験者が偏差値を盲進し、誤った進路選択を行うことを恐れたのである。基礎シリーズ（1学期）中は合格可能性を打ち出さないというのは、その対立の反映であろう。

それを受けるかのように、同年の『栄冠をめざして』後期編の巻頭記事「志望校は科学的に決めよう」では、「合格可能性が受験校決定の最大要因ではありません」¹³との断言から始まる。翌68年の後期編は巻頭記事「志望校はどう選ぶか」で「自分の興味や適性を無視して進路を選ぶことのおろかなことは、だれしも考えないはずがない。しかし、いざ大学進学志望校決定となると、その他の要因（大学の難易度・自分の実力・合格可能性など）が優先され、学部・学科選定が従的な要因になりがち」¹⁴だと批判したうえで、単なるお題目では仕方がないということだろう、2番目の記事として「学科専攻のための内容紹介」が新たに挿入されている。「特に細分化しつつある理工系学科と法・経・商・社会学科」について、どのようなことが学べるのか、各大学ごとにどのような学科構成をもち、何をめざしているのかといった紹介記事である。偏差値導入の尖兵となった河合塾にして、それを盲信することへの警戒感当初から強い。

これ以降、偏差値に代表される精緻な受験情報を提

供する一方、それが盲信され、志望校を決める唯一の指標となることを恐れ、注意喚起を続けるとともに、どの大学で何が学べるかという内容を紹介することが『栄冠をめざして』の特徴となる。

1968年には、生徒に生活・学習・進路指導を行う制度として現在に至っても河合塾の看板の一つとなっている「チュートリアル・システム」¹⁵を導入した。これは各クラスに1名チューターを置き、生徒の状況を把握するとともに、必要に応じてアドバイスをを行い、また父兄会で父兄に対応する制度である。高等学校の担任教員に相当するが、講師でなく職員が務める点に特徴があるが、いずれにせよ受験テクニックを伝授するためのマスプロ授業だけでなく、高等学校と相似形の個人面談や生活指導を行うということである。

このこと背景には、既述したように職員の意識を事務職から専門職に変化させるということのほか、偏差値盲信を排した進路設計を行わせよう（あるいは、少なくともそういう指導を行っているという印象を世間に与えよう）という確固たる意志が感じられる。

実際、チューターたる職員たちは自らを専門職として意識して研鑽に努め、熱心に生徒の生活・受験指導にあたるようになったという。城山三郎が河合塾・駿台予備校・代々木ゼミナールに取材して執筆した小説『今日は再び来らず』では、田代塾（河合塾がモデル）のある若手職員がこう語っている。

「わたくしどもは、生活指導研究会を開いて、絶えず意見やノウハウを交換しているのです。（中略）新入者訓練から管理職講習まで塾内の研究会研修会は仕事をしながらも、仕事を離れても、ともに、きわめてさかんです。それに、外部の方との研究会、外へ出たの研究会も、すこぶるさかんです。なにしろ、わたしたち男子事務員は、全員大学出でして、常に自己啓発を忘れず、前向きに問題に取り組んでいるのです」¹⁶

『栄冠をめざして』はそうした職員によって編纂されるわけで、単なる受験産業であるにしても教育的な色彩を帯びずにはいない。制度発足当初、チューターを講師と同様に「〇〇先生」と呼ばれ（せ）ていたことは象徴的である¹⁷。そうした生活指導に踏み込むありようは、受験生にはもちろん、高等学校教員や親にも

表3 『栄冠をめざして'69—前期編』（1969年3月1日）の構成

<ul style="list-style-type: none"> ・21世紀……君をとりまく世界 大学への期待と未来の可能性 ・チュートリアルシステム ・コア・カリキュラム マスプロから対話へ ・成績が示す学力の伸び 担当教官に聞く栄冠へのカリキュラム 英語・国語・社会・数学・理科 ・河合塾各科担当教官座談会 コア・カリキュラムがめざすもの [英語・竹中忠夫、 数学・浅野英夫、国語・加藤静雄、理科・近藤敦、社会・山森徹、司会；西田中和] ・チューターがきみに求める PLAN DO SEE ・この一年を闘い抜くために [関良一（東教大講師）「学問」の根本への関心]、工藤好美（元名大・京大教授、河合塾名誉校長）「栄 	<ul style="list-style-type: none"> 冠への道」、早川康弼（東工大教授）「Durch Leiden zur Freude!」 ・後輩に一言・学力と合否 ・大学入試中部統一模試 ・模試成績が示す5つのポイント 偏差値とは ・心とからだ ・志望校突破の原動力 チューター座談会 [村田重章、鈴木博充、紀藤広光、坪井勝人、佐々木昭弘、梶浦秀夫] ・学部・学科ガイダンス ・あなたの受験準備を有利にする インフォメーション ・合格実績（43年度）
--	--

表4 『栄冠をめざして'71-前期編』(1971年2月15日)の構成

<ul style="list-style-type: none"> ・河合塾教育情報システムKEIS——合格路線へ君を導く ・出題情報検索IR 入試問題を多角的に分析し新しい傾向を鋭敏にキャッチ ・カリキュラム ・測定 修得度テスト 授業をどこまで自分のものとしたか——それがきびしく問われる ・基礎力テスト 出発点での学力の素養判断 ・大学入試中部模試 実力の推移と合格可能性のチェック ・進路別大学入試難易ランキング表 ・学力の壁を突き破る クリニック 	<ul style="list-style-type: none"> ・チュートリアル 創造的な若者の世界 チューターとの対話から ・学部・学科選択の新しい視点 将来を模索している君に、進路選択の新しい視点を ・君の進路を開くインフォメーション ・仲間が交わした対話の記録 ・栄冠への日誌——こう戦ったこの一年 ・チューターが診断する 君に問う7つのポイント 浪人してよい人わるい人 ・河合塾SDPグループ
---	--

好感をもって受けとめられたはずである。

なお、この時期、発行主体や発行体制は毎年のように変化する。まだ制度的には流動していたのであろう。1968年の『栄冠をめざして』は河合塾入試資料センター編である。翌69年には前期編を旧年度内の3月1日付で発行し、入塾募集パンフレットの添付資料を兼ねるようになった。誌面構成は表3のようになり、受験情報のみならず募集案内としての性格を強めたものに変化する。また、編集発行人を西田忠和、発行所は学校法人河合塾進学指導センターとした。後期編については11月発行に繰り上げた。さらに70年には編集発行人が西田忠和、発行所は学校法人河合塾SDPグループとなる¹⁸。後期編は『栄冠をめざして 志望校決定資料集』と題して10月発行となった。72年には全国進学情報センター¹⁹編となって現在に至る。

4. 情報機関としてのアピール

偏差値盲信への恐れはあるにせよ、情報機関として立つ以上、データは最大の財産・商品である。

1970年、模擬試験の実施体制を変更し、駿台予備学校・代々木ゼミナールとの共催や、出版社系のものを採用することはなくなった。かわって「中部模試」を年6回実施し、このうち2回を一橋学院(東京)・関西文理学院(京都)と共催することとし、これを「連合模試」と称した。共催とはいえ、従来の共催校と異なり、ごく小規模な相手を選んだことから、模擬試験観の変化がうかがわれる。すなわち偏差値の導入から数年を経るうちに情報が持つ価値の大きさに気づき、単に受験者数の多寡を競うことよりも塾生の情報が他の大規模な予備校や出版社等に漏れることを防がなければならないという意識が芽生えたということだろう。以後、この実施体制が現在まで続くことになる。

また、同じ頃から、情報提供の方針・方式に斬新なネーミングを行い注目を集める形が定着する。1971年2月発行の『栄冠をめざして'71-前期編』は、表4のような構成だが、見慣れない用語が多数並んでいる。「KEIS (Kawaijuku Educational Information System)」は模擬試験の成績によりクラス再編成をし、また適切な進路指導を行うこと。「IR (Information Retrieval)」は入試問題の検索システム。「クリニック」は学習の進め方に関する個別指導。「基礎力テスト」「修得度テスト」

はマークシート式の校内模擬試験の名称で、前者は入塾直後に実施して各教科の弱点を探るもの、後者はほぼ毎週実施するもの。いずれも内容はさほど奇抜でないが、ネーミングの妙で期待を抱かせる効果はあろう。

1972年からは前期編を『河合塾のすべて』と改称²⁰、『栄冠をめざして』は後期に発行する受験校決定資料集のみとなる。1973年10月発行の『1974 栄冠をめざして』の編集は全国進学情報センター、編集責任者は西田忠和。同号より裏表紙には頒価100円と打たれ、実際に書店にも並んだが、中心は無償配布であった。

このことによって『栄冠をめざして』の発行回数は年1回となったが(新課程入試初年度の1975年のみ前期・後期の2回発行)²¹、実質的には『河合塾のすべて』も高等学校教員の手にもわたるから変化はない。高等学校とのコミュニケーション・ツールとしての重みに変化が生じたわけではない。それどころか、この1973年からは高等学校教員を集めて(すなわち河合塾が旅費を負担して)最新情報を提供する「研究会」をスタートさせており、高等学校とのパイプをさらに強化する方針にあったことは明白である²²。

この研究会の席上、全国進学情報センター所長として西田が語った「進学指導と情報について」と題する報告の一部を抜粋してみよう。

「必要なのは情報ではなくて何か情熱のような感じがする。指導する側に必要なのは情報はさることながら、更にそれに何か暖かいものがつけ加わった情熱が必要であるという感じがするわけでございます。入学試験が近づいてまいりますと、各大学は入試要項を出します。いわゆる大学側が発信する進学の情報、大学側が生徒に提供する、受験生に与えている進学の情報、そういうものも振り返ってみますと例えば、国立大学が夏出している入試要項、極めて無味乾燥でございます。(中略)では、私立の大学ではどうかということになりますと、これまたあまりにも何といたしましうか、宣伝的とでもいいまじうか、そういうような感じが致します。(中略)そこで、今日までコンピューターをガチャガチャ使いまして、しこしこデータ活動をやってまいりましたが、全国進学情報センターとしては生徒にもっと情熱を喚

起させるような、そういうデータ活動を今後強力に進めていきたいと考えているわけでありませう。受験生に与えるもの、一般的に大切なものとして未来への希望を与え、進学を夢を抱かせる学問的な興味、雰囲気を与えていくことが必要ではないかと思うわけでございます」²³

前節で指摘した、偏差値盲進を恐れ、そこから脱却するために「学問的な興味、雰囲気を与え」ようという河合塾の方針は、ここでも一貫している。

翌1974年には、10月に学生会館で「東大入試研究会」を開催した。全国から高校教師42名（うち東京15名）が参加したほか、大学関係者からも小林靖之（東大広報企画課長）、奥幸雄（東大講師）、早川康弼（東工大名誉教授）、鈴木一雄（東教大助教授）、齊藤敏弥（慶大教授）が参加した²⁴。続いて12月、駿台予備学校の本部から目と鼻の先の位置に東京事務所を開設するとともに、「東大入試オープン」と題した模擬試験を実施した²⁵。特定校に絞って入試予想問題で実施する模擬試験は業界初で、約3,000名が参加した²⁶。

こうして入念に情報機関としてのアピールを実施した後、1977年には駒場校を開設した。予備校関係者から「殴り込み」²⁷と称された他地域への進出である。

また、同年には「全国共通一次模試（翌78年度から全統一次模試と改称）」「全統記述模試」をスタートさせ、静岡・金沢・長野・高松に事務所を開設した。

翌1978年度には東京本部、岐阜・広島・長崎の各事務所を開設したほか、共通一次の自己採点結果に基づき志望校のボーダーライン（合格最低線）をはじき出すための仕組み（後にPDSP(Private Data Shift Program)と呼称）の研究を開始するなど、共通一次対策につい

での準備作業に着手した²⁸。情報機関としてさらなる高みをめざし、全国に拠点を築く全国型予備校というカラーはこの時期に確立したとあってよい。偏差値盲進への注意喚起は続けつつ。

5. 共通一次体制に対応した発行回数の増加

1年間の受験生活の始まりに『河合塾のすべて』、出願校を決定する秋に『栄冠をめざして』という発行スタイルが変化したのが1978年である。この年は7月に『共通一次入試対策編 '79栄冠をめざして 教師用』、9月に『1979 栄冠をめざして 前期編』、12月に『1979 栄冠をめざして 後期編』と発行回数は3回に増加した。教師用は受験科目・難易度などのデータ集、前期編・後期編は表5・6に示したように、従来の読ませる記事中心の構成である。翌年からは前記編が第1編、後期編が第2編と改称するものの、発行体制は変わらない。

この1978年度は、従来の一期校・二期校に分かれる国公立大学の入試制度にかえ、大学入試センターによる国公立大学入学者共通第一次学力試験（いわゆる共通一次）と大学毎に実施する個別学力検査（いわゆる二次試験）を1校のみ受験する形になった年である。しかし、十分な情報提供もないまま、急激な変化への対応を迫られた受験生・高等学校の側は当惑し、混乱していた²⁹。

河合塾では他の予備校以上に、そうしたニーズがあることは把握していたはずである。チュートリアル・システムによって、職員は単なる事務職ではなく、日々生徒の相談に応じ、また受験指導に当たる専門職であったからである。自らの指導に必要な資料は新た

表5 『1979 栄冠をめざして 前期編』（1978年9月）の構成

<p>◇全国進学情報センターより来春受験生へ 西田忠和（全国進学情報センター所長）</p> <p>解説編</p> <p>◇54年度入試はどう行われるか 制度改革の留意点と対策</p> <p>◇ブロック内受験生の動向を探る 北海道、東北圏、首都圏、中部圏、近畿圏、中・四国圏、九州圏</p> <p>◇フィクション A君はこうして模試データをいかした 模試と合格可能性診断 難化の著しい私立大</p> <p>◇ここで差がつく共通一次 一次対策学習アドバイス</p> <p>◇二次論述問題をズバリ予想する</p>	<p>予想問題例、学習対策</p> <p>データ編</p> <p>◇〈国公立大学〉共通一次入試難易ランキング表</p> <p>◇〈私立大学〉入試難易ランキング表</p> <p>◇〈短期大学〉入試難易ランキング表</p> <p>資料編</p> <p>◇大学別二次試験科目一覧表 面接、実技、小論文、二段階選抜の有無</p> <p>◇第二次募集を実施する大学</p> <p>◇推薦入学実施校一覧</p> <p>◇入試日の異なる公立大学</p> <p>◇主要国公立大 一次と二次の配点ウェート表</p>
--	--

表6 『1979 栄冠をめざして 後期編』（1978年12月）の構成

<p>◇いよいよ本番を迎える受験生諸君へ 西田忠和（全国進学情報センター所長）</p> <p>国公立対策編</p> <p>◇どうなる一次・二次の総合判定 大学ごとに異なるウェート付け</p> <p>◇国公立120大学 一次と二次配点ウェート&二次科目一覧表</p> <p>◇国公立大一次・二次総合ランキング表</p> <p>私立対策編</p>	<p>◇54年度激戦私立大入試を突破する 増える私立受験生 難化の著しい中堅私立大</p> <p>◇私立大・短大入試難易ランキング表</p> <p>学習対策編</p> <p>◇本試験得点一割アップ学習アドバイス</p> <p>◇小論文、面接試験をクリアーする</p> <p>◇マークシート出題とその対策</p>
---	--

表7 『栄冠をめざして 1983／vol.①先生用』（1983年4月20日）の構成

■（巻頭寸言）大半の国立2次が科目増 丹羽健夫（全国進学情報センター所長） ■特集 60年度入試科目一覧	国公立大 私立大 国公立大2次入試科目比較表（58年度VS60年度）
--	--

表8 『栄冠をめざして 1983／先生用〈第2編〉（データファイル・国公立大学編）』（1983年5月30日）の構成

■特集 58年度国公立大入試基礎データ集録 58年度共通1次学力試験概要	国公（私）立大2段階選抜実施状況 58年度国公立大入試状況 全統模試受験生の共通1次自己採点得点からみた合否の実態
--	---

表9 『栄冠をめざして 1983／先生用〈第3編〉（データファイル・私立大学編）』（1983年5月30日）の構成

■特集 58年度私立大入試基礎データ収録	58年度私立大入試状況 全統模試からみた私立大合否の実態
-------------------------	---------------------------------

に作成して需要に応じ、それは職員間で共有され、有効となれば高等学校にも流し、場合によっては書店で販売もした。

その一つの形が、初の共通一次を終えた1979年夏に発刊となった『大学進学データファイル』^{*30}である。全国的な入試状況の変動、大学の内容紹介、受験科目・難易度や学習法といった情報を掲載する『栄冠をめざして』とは異なり、同誌は地区別の入試動向、2段階選抜・2次募集・補欠合格・小論文・面接・実技といった具体的な記事や、さまざまな加工情報を掲載する。それらは受験情報としては王道ではなく、むしろ邪道かもしれないが、現場（むろん高等学校でも予備校でも）で生徒を指導する者としては是非とも理解しておきたいものばかりである。共通一次が実施されるや、さっそくこうした形で受験情報誌を立ち上げる機動性の背景として、チュートリアル・システムの存在は無視できないと考えられる。

この『大学進学データファイル』の配布・販売状況については資料が残っていないが、好評を博したと考えられる。そして、その内容を継承し、統合する形で、1983年から『栄冠をめざして』は発行回数を倍増させる。すなわち教師用・生徒用とも年3冊、計6冊の発行とした。以下、タイトルと発行日を示す。

なお、途中で年度が変わるように見えるが、1984年度入試に対応した情報ということで年号を進めるのが受験界のスタイルであり、間違いではない。

- ・『栄冠をめざして 1983／VOL.①先生用』（4月20日）
- ・『栄冠をめざして 1983／先生用〈第2編〉（データファイル・国公立大学編）』（5月30日）
- ・『栄冠をめざして 1983／先生用〈第3編〉（データファイル・私立大学編）』（5月30日）
- ・『栄冠をめざして 1984年度版／第1編（受験校決定資料集）』（6月30日）

- ・『栄冠をめざして 59年度入試科目一覧表 1984年度版』（8月30日）
- ・『栄冠をめざして 1984年度版／第2編（受験校決定資料集）』（10月31日）

このうち教師用に発行した初めの3点について、構成を表7～9に示す。文字通りデータだけで編纂した教師用の資料集である。かくして高等学校には、受験生が誕生する春から志望校を決定する秋まで、ひっきりなしに受験情報誌『栄冠をめざして』が送付され、また教員はそれらに依拠して生徒に受験指導を行う形が1980年代前半には全国各地の進学校で形成され始めたと考えられる。

なお、この間の1982年1月16日に河合斌人塾主が出向先の山一証券を退職し、塾主業務に専念する^{*31}。これを受けて西田忠和は辞表を提出し、同年12月16日付で河合塾顧問・河合塾教育システム取締役会長に就任、受験指導の最前線から退いた^{*32}。

以後、河合斌人と丹羽健夫が二人三脚で河合塾の経営を進める。『栄冠をめざして』の発行回数の増加についても、従来の路線を引き継ぎつつ、さらに情報機関としての信頼性を高めるために必要だと判断したのであろう。もちろん「フランチャイズ」としてやる以上、高等学校の側がそれを渴望していたことは想像に難くない。

おわりに

以上、河合塾が全国型予備校へと展開してゆく過程で編纂・配布していた受験情報誌『栄冠をめざして』は、塾生のみならず高等学校教員とのコミュニケーション・ツールとして始まった小冊子であったが、共通一次という受験制度の大転換によって一挙に発行回数・内容が充実したということがわかる。

その背景には、官製の情報があまりにも少なかったことを指摘しなければなるまい。西田が言うように、

大学入試センターは共通一次の実施に関する業務しか行わず、各国公立大学も無味乾燥な大学案内を夏に1部出すのみ。それさえ郵送で1校毎に入手するほかなかった。私大の大学案内は広告臭が強かった。無論、大学ホームページもなければ、大学生たちがつくるブログも、インターネット上の掲示板もなかった。

一方、河合塾がお膳立てした情報は、数値化されていて論理的・視覚的であり、またよく大学の内情を伝えていた。単なる商売を超え、自らチューターとして指導する塾生を抱える職員が作った情報は、実践的・体系的でもあっただろう。情報過疎の中に置かれた受験生・高等学校側は依存するほかなかった。模擬試験を受け、その結果分析なんかずく偏差値と志望校のボーダーラインを注意深く読み、また『栄冠をめざして』が指し示す受験情報・大学情報を知ることなしに、たった1つの出願校を決めることなどできなかった。

その問題点が最も如実に表れたのは、共通一次の自己採点という仕組みであった。大学入試センターが公表したのは、設問ごとの正解に加え、設問をいくつか束ねた大問毎の配点、科目毎の平均点と標準偏差のみ。個人の得点はおろか、各設問ごとの細かい配点すら公開しなかった。

そこに注目した河合塾は、PDSPを創設した。実施主体は入試データ研究所とあるが、実質的には河合塾そのものである。1978年10月、『栄冠をめざして』とは別に各高等学校に配布されたパンフレットの表紙には、「共通一次直後／全国受験生の／自己採点結果から／志望大学への／順位と合格可能性ラインを／コンピュータで推算判定します」とうたった。キャッチフレーズは「きみの不安はズバリ解消。共通一次本番でのきみの順位をマル秘で知らせます」^{*33}。

このことについて、受験生や教育関係者の反応は複雑であった。例えば、以下のよう。

「名古屋市高教組などの教育団体は「このままでは受験生の弱みにつけ込んだ受験産業がますます、のさばるばかり」と批判。同高教組や愛高教では、全国に先がけ、今月末から本格的な「共通一次見直し運動」を展開することになった。(中略) 県立旭丘高校の瀬尾俊平教諭は「入試センターは全科目総合点と各科目別得点ごとの標準偏差を公表するというが、個人の成績も含め、もっとデータを提供しない限り、受験生たちがPDSPに申し込むのは、やむを得ない現象だと思う」と話している。しかし、明和高校の豊嶋史郎教諭は「(中略) 受験教育はすべてデータ中心となり、本人が進学の目的をじっくり考えたり、学部を選択するなど基本的な姿勢がなおざりにされる心配がある」としている。(中略) 原哲朗名古屋市長は「三千円の診断料など、このままの共通一次システムが続くと、得をするのは受験生たちの弱みをつい

た受験業者だけということにもなりかねない(中略)」と話している。だが、すでに申し込みをした名古屋市内の県立高校三年A君は「自分が全国でどのくらいのランクにあるかを知るには、ほかに方法がない。三千円も各種模擬試験の受験料の相場からいって、そう高いとは思わない」と割り切った意見。また同B君も「先生は気まずそうに紹介したが、今後の共通一次試験結果の分析は大手予備校でないと無理なのではないか」と話していた。国立大学協会入試改革委員として、共通一次試験の実施を推進した丸井文男名大教育学部教授は「大学入試データ研究所の話は聞いている。好ましいことだとは思っていない。しかし、現段階で、個人の成績の公表などはとても考えられない」と言っている^{*34}。

賛否両論、百家争鳴の状態だが、そもそも問題は重要な情報を伝えないまま人生の岐路を選ばせる制度自体にあったことは確かである。商売とはいえ河合塾などがこうした分野に手を広げなければ、受験生・高等学校側は文字通りの暗中模索を強いられたはずである。暗中模索であっても、それは「受験地獄」「二期校コンプレックス」の改善であり、望ましいと考えていたのなら、受験生(や親・高校教員)に対する著しい配慮の欠如である。また、共通一次の自己採点結果を集計し、合格可能性をはじき出す仕組みが構築されることを予期していなかったのなら、人智の程度を読み誤っていたと言うほかない。そもそも共通一次を導入して受験制度を単純化した時点で、こうした仕組みが生み出されることは想定すべきであった。

また、偏差値を導入し、その他さまざまな情報を提供して高等学校を依存させ、いわば手中に収めていったことについても、どう評価すべきかは難問である。

「予備校戦争」さなかの1984年に、共通一次の国語(現代文)問題を的中させるなどして時代の寵児となった河合塾講師・牧野剛は以下のよう言う。

「共通一次の始まる前からその後の変化に一番鋭く眼をつけたのが、河合塾だった。かつて名古屋にあった、ほんのちっちゃな生徒が千人もいないような予備校だったが、共通一次体制が来ると見こして、全国にニュースを集める支店を出した。教育産業とか受験産業でなく、情報産業としての予備校をとという発想である。コンピュータを導入して、全国にネットワークをつくって、情報を吸い上げては、情報をまき散らす。教育も、結局授業は情報だとして、予備校を情報産業と位置づけた。」^{*35}

しかし、本当に河合塾はそこまで戦略的だったのだろうか。「情報をまき散らす」のは講師ではなくもっぱら職員であろうが、その職員はチューターとして塾生を指導する立場でもあるのだ。その情報とは、自らの

指導に必要だったはずである。

さらに、共通一次体制に対応して『栄冠をめざして』の発行回数を増加させる段階でも、引き続き以下のような文章を掲載していることにも注目が必要である。

「本冊子の、とりわけ難易ランキング表は、受験生の夢や理想を現実に引きもどす悪役を演じるだろう。ときには合格への自信を失わせるかも知れない。編集者として、その意味では心が痛む。

大学入試の難易ランキングは、予備校や受験産業がつくるものだという批判を浴びている。しかし、本冊子に収録したランキング表は、数十万名にのぼる受験生が記した模試成績にもとづく純粋な分析の結果である。その意味では、ランキング表を編み出したのは受験生そのものであり、受験生が記したデータに忠実なものである。

とはいえ、このランキング表に振り回されて志望する大学・学部を、軽々しく変更する受験生は、本冊子の編者が最も軽蔑する者である。ランキング表は、志望する大学・学部合格可能な努力の道程を示唆するものにほかならない。データに振り回されない主体性、これこそ受験生の受験生たる資格でもある」³⁶

これをも単なる世間へのポーズ、エクスキューズの類だとみることには可能である。妥当であるか否かはわからないが。ただ、いずれにしても20年近くの間、こうした言説を掲載し続けたことは事実である。少なくとも職員（兼チューター）の間で、偏差値への盲進は常に注意を喚起しなければならない塾生指導上の大問題だと意識され続けてきたのは確かだろう。「受験戦争を過熱させた悪役」というレッテルから離れ、当時の予備校の内部はどうであったか、またその活動が教育現場とどのように結びついたかについて、今後も分析を続けたい。

注

- * 1 河合塾五十年史編纂委員会編（1985）『河合塾五十年史』学校法人河合塾、74ページ。
- * 2 同上、143ページ。
- * 3 片山修（2007）『塾経営こそわが人生』学校法人河合塾、74ページ。河合斌人の回想。
- * 4 長男の斌人は塾主、次男の邦人は理事長、三男の恒人は学校長に就くが、いずれも現場で采配を振るうことはなかった（『河合塾五十年史』184ページ）。
- * 5 ただし、1967年度には国公立大コース・私立大コースのクラス分けに変更している（『河合塾五十年史』235ページ）。いかなるクラス分けが良いか、試行錯誤を続けていたといえよう。
- * 6 偏差値は、東京の公立中学校教諭であった桑田正三が1957年に公立高校受験の指導用に導入したものであることはよく知られている。しかし、一部の例外を除き受験者のすべてが1都道府県内で完結する（したがって全員受験の模擬試験を実施しうる）高校受験とは異なり、大学受験の場に偏

差値を導入することはなかった。確認できる最古の事例が、同年の旺文社編『蛭雪時代』8月号附録の「大学入学難易ランキング」、そして河合塾が作成した「大学入試難易ランキング表」（発行月不明）である。

- * 7 「河合塾新聞」1966年3月15日号。
- * 8 大学名を冠した模擬試験（例えば「東大コンクール」「京大コンクール」）は、当該大学の学生が教官を巻き込む形で組織した一種のサークルが作成し、予備校を会場として実施することもあった。例えば、名古屋大学の場合、主催者は名古屋大学学生文化研究会、事務局は名大構内にあり、模擬試験「名大コンクール」、通信添削（5教科）、受験情報誌『名大受験』の発行を行っていた（同誌1963年春季号[第3巻第1号]）。丹羽健夫（2004）『予備校が教育を救う』文春新書、46ページによれば、大学紛争により、大学生が受験生心理につけ込んで金儲けをすることへの自己批判が高まり、順次消滅していったという。
- * 9 ただし、西田忠和の教示によれば、大学受験の世界に偏差値を持ちこんだのは河合塾だとのこと。
- * 10 当時は全国的に公立高等学校教員でも予備校でアルバイトすることは黙認されており、多くの進学校の教員が夜間や土日に出講していた。
- * 11 河合塾進学指導部編『栄冠をめざして 前期編』（1967年7月1日）、12ページ。ただし、主催2回、共催2回（駿台予備学校、代々木ゼミナールと各1回）で、方針は変わっていない。
- * 12 丹羽健夫によると、自身が入塾した1968年になってもその議論は続いていたという。
- * 13 河合塾進学指導部編『栄冠をめざして 後期編（昭和43年度入試資料）』（1967年12月1日）、3ページ。
- * 14 河合塾入試資料センター編『栄冠をめざして 後期編（昭和44年度入試資料）』（1968年12月1日）、2ページ。
- * 15 ただし、同様の仕組みは従来からあり、この年からチュートリアル・システムという名称を付したようである。河合塾入試資料センター編『栄冠をめざして '69—前期編』（1969年3月1日発行）の「チューター座談会」には、かつて指導した塾生が現在は大学を卒業してトヨタ自動車勤務しているとの談話あり。
- * 16 城山三郎（1977）『今日は再び来らず』講談社。執筆にあたっては、見学のみならず講師・職員へのインタビューまで行った。西田忠和の教示によれば、小説中の田代塾は、当時の河合塾そのままだという。
- * 17 『栄冠をめざして '70—前期編』（1970年3月1日）、33ページのカラー写真では、丹羽と生徒が向き合い、「先生ちょっと聞いてほしいんです」／「オッ いいよ。どこかでお茶でも飲まないか」／ある放課後の教室で」とのキャプションがついている。また、38ページのチューター座談会では、全員が「先生」と呼び合っている。なお、現在は先生ではなくチューターと呼ぶが、そのように転換した時期は不明。
- * 18 「SDP」は「Self Developing Project」の略で、校訓の「汝自らを求めよ」に通じる理念として創出し、対外的にもアピールした表現。『河合塾五十年史』216ページを参照。
- * 19 「全国各地の有力予備校と連合して」（『河合塾五十年史』222ページ）設置したとあるが、実際には河合塾の校舎・事務所がない地域にあって、同塾の模擬試験を採用する予備校を集めたもの。当初は、仙台（東北文理専修学校）、東京（一橋学院）、新潟（新潟予備校）、中部（河合塾）、京都（関西文理学院）、大阪（大阪予備校）、神戸（神戸コロンビア

学院)の7支局で発足。のち路線対立により一部の予備校が離脱したことへの対応や、校舎の全国展開のため、自前の支局を次第に増加させる。この結果、2003年度には他予備校の支局は札幌(札幌予備学院)・仙台(河合塾文理)・鹿児島(鹿児島高等予備校)のみとなり、札幌予備学院を統合して河合塾札幌校とする04年度からは模擬試験の実施主体を河合塾に変更し、全国進学情報センターの名称を使用しなくなった。

- *20 1975年からは『燃ゆる青春の一年』、77年からは『燃える試練の一年』、80年からは『燃える青春の一年』と改称する。表紙写真は河合塾運動会の騎馬戦や棒倒し。タイトルにはあうが、予備校らしいイメージではない。
- *21 1976年からは再び10月に1回のみ発行となる。
- *22 現在は全国各地の校舎もしくはホテルなどを借りて実施しているが、この年は千種校のみで「48年度全国進学情報研究会」と題して実施し、全国各地の国公私立高校から290名(うち愛知101名、静岡19名、岐阜23名、三重31名)の高等学校教員が参加した。
- *23 河合塾所蔵「48年度 全国進学情報研究会 議事録」9ページ。
- *24 『河合塾五十年史』294ページ。ただし、大学関係者といっても事務官1名以外は河合塾に出講していた者であろう。当時は、国公立大学の教官が予備校でアルバイトすることも問題視されていなかった。
- *25 『河合塾五十年史』292ページ。
- *26 『河合塾五十年史』219ページ。なお、1976年には6,600名を超え、同年度の東大合格者3,088名のうち1,940名(62.8%)を占有したという。
- *27 「朝日新聞」1989年4月25日付。なお、駒場校と同時に豊橋校も開設したが、こちらは話題とならず。
- *28 『河合塾五十年史』、383ページ。
- *29 例えば、日本教職員組合(日教組)は1978年5月に「国公立大学共通一次テスト問題に関する意見」を発表し、中止を要求している。
- *30 奥付がないため、正確な発行日は不明。また、年間の発行回数も不明で、一般販売はなし。なお、翌1980年からは年3回発行したことが確認でき、いずれも定価300円で一般に販売されている。
- *31 『河合塾五十年史』291ページ。
- *32 西田忠和の教示による。
- *33 「中部読売新聞」1978年10月27日付。
- *34 同上。なお、「三千円の診断料」というのは、河合塾を含め各予備校とも無料で実施している現状からすると奇異な感じを受ける。『河合塾五十年史』383ページによれば、以下のような経緯で共通一次初年度は河合塾のみ有料で実施し、2年目からは無料化したという。
- 「河合塾がPDSPの実施を公にするや、そのあとを追いかけるようにして代々木ゼミナール、旺文社などが同様のシステムを発表して名乗りを上げた。(中略)高校の一部からは、生徒の個人的なデータ(共通一次試験の自己採点結果)を民間業者の手に渡すのは、けしからんといった声も出た。このような批判的の空気に対処するため、河合塾では“それならばアンサーシートの提供料、すなわち情報料を頂くことにしよう、料金を払って河合塾から情報を買う分には、個人の意思に基づくことになる”というので、一人当たり3,000円の値段をつけた。もちろん河合塾側としても、これだけ良質の情報を提供するのだから、商売としても成り立つという自信があったことはいうまでもない。ところが先述したように、他の大手も同様主旨の名乗りを上げ、しかも無料サービスの線を打ち出した。」
- *35 牧野剛(1987)『増補ザ・予備校 87年度版 オモシロクになったヨビコーを解剖する』第三書館、80ページ。
- *36 全国進学情報センター編(1978)『1979 栄冠をめざして後期編』1ページ。

※この論文は、平成21～25年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C))「全国型予備校の形成過程からみた日本の教育——河合塾と高等学校の関係に注目して——」(研究課題番号:21530796, 研究代表者:三上敦史)による研究成果の一部である。

(2009年9月17日受理)